

ゼパニヤ書3章14-17節 「私たちを歌われる主」

1A 只中におられる主 14-15

1B 喜び叫ぶエルサレム 14

2B 取り除かれる主 15

1C 民への宣告

2C 敵

3C 災い

2A 喜び、歌われる主 16-17

1B もはや恐れないシオン 16

2B 救いの勇士 17a

1C 力ある神

2C キリストの血

3B 楽しまれる方 17b

1C 存在の喜び

2C 愛する安らぎ

3C 存在への歌

本文

ゼパニヤ書を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、前回でハバクク書まで来ました。午後礼拝でゼパニヤ書 1-3 章全部を一節ずつ読んでいきます。今朝は、3 章 14-17 節に注目します。「14 シオンの娘よ。喜び歌え。イスラエルよ。喜び叫べ。エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。15 主はあなたへの宣告を取り除き、あなたの敵を追い払われた。イスラエルの王、主は、あなたのただ中におられる。あなたはもう、わざわいを恐れない。16 その日、エルサレムはこう言われる。シオンよ。恐れるな。気力を失うな。17 あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。」

1A 只中におられる主 14-15

ここに、「主は、あなたのただ中におられる。」という言葉が二度、繰り返されています。今、読んだところは、イエス様が再び地上に戻って来られて、神の国を地上に建ててくださり、エルサレムにイエス様がおられる姿です。イエス様がエルサレムに再建された神殿において、その王座に着いておられるために、エルサレムの住民が喜び歌い、喜び叫び、そして躍り上がって、勝ち誇っている幻を、ゼパニヤは描写しています。今も、エルサレムに行けば、黒装束を身にまとった超正統派ユダヤ教徒の人たちが、祭りや記念日において、何時間も何時間も、踊りに踊って喜びを表し

ます。けれども、気になるのはどの歌も短調なのです。どこかに、一種の暗さがあり、全く明るいものとは言えません。なぜか？聞くとところによると、メシヤがまだ到来していないからと言われていません。異邦人で、キリストによって神を知った私たちは、真っ直ぐに神を喜んでいますが、初めから選ばれているのに、それに応答しきれていないユダヤ人の姿とは対照的です。しかし、ここでは神の国、御国が地上に打ち立てられています。イスラエルの残りの民が、エルサレムにおいて大声で、主を喜び、踊っているのです。

実はこれが、イエス様が弟子たちに、「こうやって祈りなさい」と命じられた祈りがかなえられている姿です。「マタイ 6:9-10 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。』その御国の中心人物は、救い主であられる、私たちの主イエス・キリストです。

イエス様は、私たちに、その真ん中においてくださるという恵みを与えておられます。弟子たちが、イエス様の復活後に、ユダヤ人を恐れて戸を堅く閉めていた時のことを思い出してください。「その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。(ヨハネ 20:19-20)」弟子たちは、自分たちがイスラエルを贖う方として付いて行った、イエス様がローマの十字架によって、惨たらしく殺されたのでありますから、仲間のユダヤ人に対して、これほど恥を覆ったことはありません。そして彼らからそしられ、また危害を加えられ、また殺害さえされるのではないかと思って、恐れていた時に、イエス様がそのまま真ん中におられたのです。それで、イエス様は平安があるように、と言われ、弟子たちは幽霊ではなく、手も脇腹も見て、確かに主が生き返られたことを目撃し、喜んでいるのです。主が真ん中におられるということには、安心と、喜びがあります。

そしてイエス様は、聖霊によって彼らと共におられ、その中におられることを約束されました。「マタイ 18:19-20 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」弟子たちの間に、復活のイエス様が真ん中に現れて来てくださったように、私たちが主の御名で集まって祈る時に、そこに主がおられて、その祈りを聞いてくださいます。なんとすばらし特権でしょうか、私たちは心を合わせて、一つになって祈ることの祝福と恵みを想います。

1B 喜び叫ぶエルサレム 14

そして預言は、エルサレムの娘たちに、「**喜び歌え**」「**喜び叫べ**」「**心の底から、喜び勝ち誇れ**」と呼びかけています。このように、私たちは主に対して喜び叫んでいるでしょうか？なかなか、飛び

上がるような喜びって、私たちは表現するのが難しいですね。普段したことがないので。けれども、もしスポーツの好きな方がおられたら、スポーツ会場で自分の応援するチームが優勝したら、飛び上がって喜ぶことでしょう。自分の愛する息子、娘が、受験で合格通知が来た時には、一緒に飛び上がって喜ぶことでしょう。

けれども、主にあって同じように喜び勇むことができます。預言者ハバククがそうでした。「しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。(3:18)」前回の学びでお伝えしましたように、ここの喜び勇むは、まさに躍り上がって喜ぶことを示しています。なぜ、ハバククはそんなことができたのかと言いますと、主が示された幻を信じて、受け入れていたからです。「見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。(2:4)」神のことばを、まっすぐにそのまま信じ、受け入れる時に、私たちはその場で躍り上がって、喜びを表したいと願うはずです。信仰を持つということ、まだ見ぬ神の約束を、そのまま信じて受け入れることです。そして、その将来についての確証に基づいて、行動に移すことです。チャック・スミスの書いた本に、「信仰」という題名のものがありますが、その中に、ご自分の息子あるいは孫でしょうか、まだ小学校高学年あるいは中学校初頭の時に、まだ顎に髭が生えていないのに、剃刀を当てて髭剃りをしていたのだそうです。「必ず髭が伸びて来る」という信仰によって、すでに髭剃りをしています。それが、今の私たちの信仰の姿と言えるでしょう。これから来るキリストの栄光の現われを思って、今から喜び踊ります。

パウロは、信仰によって義と認められた者に与えられている恵みを教えています。「ローマ 5:1-2」ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。」義と認められるということは、私が何も罪を犯したことがないかのように、みなされるということです。または、キリストが正しいように、神がキリストによって私を正しいとみなしておられるということです。私は、全く正しくない、むしろ滅びに向かっている悪者なのに、それでもキリストの流された血によって罪赦され、キリストの義がかえって私のものとされるという、どんでん返しをしてくださったのです。ですから、天において、聖なる、恐るべき神の前に立っても、その栄光の前で私たちは、何ら滅ぼされ、震え恐れる必要は全くなく、その栄光を見て大いに喜ぶことができます。

2B 取り除かれる主 15

1C 民への宣告

なぜ、そんな大いなる喜びが出て来るのか、ゼパニヤも預言しています。一つは、「**主はあなたへの宣告を取り除**」いたと言われます。つまり、「私は、あなたが罪を犯したので罰する」という宣告が取り除かれたということです。私たちが、自分を罪定めする根っこが除かれたということ、ここに私たちに重くのしかかる負担が取り除かれ、解放されるのです。

ダビデが、詩篇の中で自身の罪が赦されたことを次のように述べています。少し長くなりますが、32 篇 1-7 節まで引用します。(ゆっくり読む)「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。セラ私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。セラそれゆえ、聖徒は、みな、あなたに祈ります。あなたにお会いできる間に。まことに、大水の濁流も、彼の所に届きません。あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を取り囲まれます。セラ」そうですね、罪を言い表し、その罪が赦されたことを知った時、救いの歓声が聞こえて来そうになります。私も、大学生の時に先輩のクリスチャンに、自分が罪を犯したことを伝えにいきました。その場で、彼は祈ってくれました。涙が溢れました。そして彼は、「食堂に行ってお飯食べよう」と言ってくれました。その時に、心が現れ、救いの歓声に取り囲まれたことを覚えています。

2C 敵

そして喜びがあふれて来る、もう一つの恵みは、「**あなたの敵を追い払われた**」ということです。イスラエルの民を滅ぼそうとする敵が、彼らを取り囲んでいました。しかし、主は徹底的に彼らを滅ぼし、追い払われました。主がこれらの敵が攻撃するのを許されたのは、彼らの罪に対して懲らしめを与えるためです。しかし、今や主は、へりくだる彼らのために罪を赦し、憐れみの御霊を注いでおられます。それで、罪のゆえに敵が虐げるのをそのままにしておかれた主が、今や、彼らのために敵に戦ってくださり、追い払ってくださったのです。

私たちも、自分の罪のゆえに自分が傷つき、躓いていることがあります。キリスト者として、自分に負い目があり、その弱みがあるので大胆にキリスト者としての告白ができません。そこにサタンがつけ込みます。何か不便なこと、不都合なこと、悪いことが起こる時に、それが起こったのはあなたが隠し持っている過去のせいなのだとしみます。しかし、罪を主が取り除かれた今、敵が付け入ることができなくなっているのです。パウロは、「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ 8:1)」と言いました。そして、「神が私たちの味方であるなら、だれか私たちに敵対できるでしょう。(31 節)」と言いました。主が、私たちを責め立てるサタンを、逆に責め立ててくださり、私たちに新しい義の服を着せてくださいます。

3C 災い

そして喜びの源となっている、三つ目のことは「**あなたはもう、わざわいを恐れない。**」であります。ゼパニヤ書には、主の日における災いの幻があります。地の面からすべてのものを除く、彼らは主に罪を犯しているから、わたしは人を苦しめると言われます。それは、エルサレムにも及び、高ぶっている者たち、偶像礼拝を行なっている者たちを取り除かれます。そのような災いが襲い掛か

りますが、主は、「**あなたはもう、わざわいを恐れない。**」と安全保障をしてくださいます。

私たちは常に、災い、悪いものに取り囲まれています。イエス様は、御国が来るようにと祈りなさいと言われた中で、「私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください。(マタイ 6:13)」と祈りなさいと言われました。そして、主の憐れみによって災いから守られることが、詩篇の箇所にも約束されています。91 篇には、イスラエルの民が荒野の旅の中で、いろいろな恐ろしいこと、疫病や外敵からの恐怖がありましたが、「あなたが私の避け所である主を、いと高き方を、あなたの住まいとしたから(9 節)」それらの災いから救い出されると約束されています。46 篇には、「われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。(2 節)」とあり、理由は、神が聖なる住まい、神の都の真ん中に住んでくださっているからだとあります(4-5 節)。ここのゼパニヤの預言と同じ幻です。主が真ん中におられるということで、災いを恐れることはないということです。

2A 喜び、歌われる主 16-17

そして 16-17 節に、驚くべき主の行動があります。主が、ご自分の都に住んでいるエルサレムの住人たちをこよなく愛し、その存在を喜んでおられる姿です。ところで、私たちは喜ぶだけでなく、楽しむことの中にも入っています。楽しむとか、喜ぶということが、あたかも悪いかのように感じてしまう私たちですね。しかし、神の怒りを受けるかもしれないという恐れが取り除かれれば、そこに残されているのは喜びと、そして楽しみしかありません。しかも、私たちが神を喜ぶだけでなく、楽しんでくださっておられるのです。

1B もはや恐れないシオン 16

16 節に、「**シオンよ。恐れるな。氣力を失うな。**」と言われます。すでに説明したように、主の日による恐怖を彼らは感じていた事でしょう。けれども、もう恐れるな、氣力を失うなと言われます。主の日、すなわちこれから地上に下る大患難です。それはあまりにも恐ろしい出来事であり、私たちはそれを読むと、心が重くなります。また、「はたして自分は大丈夫なのだろうか。」とさえ思います。しかし、十字架に走ってください。主が神の御怒りを受けたところに走ってください。そこは避難所です。恐れる必要は全くありません。パウロはテサロニケ人に、こう励ましていました。「1テサロニケ 5:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。」教会は、この災いが地上に下る前に天に引き上げられることによって救われます。

2B 救いの勇士 17a

そして、17 節で、主が只中におられて、「**救いの勇士だ**」と言われます。私たちが、これを先ほど高らかに歌いました。ここは、もっと詳しく言いますと、「救うのに、力ある方」ということです。勇猛な戦い、力ある戦いを、残されたイスラエルの民を救うために行われたということです。ゼパニヤの預言には、エルサレムを攻撃してきた周囲の国々が一網打尽にされている姿が出てきます。

1C 力ある神

主は力ある方です。イエス様がお生まれになる預言をイザヤが語った時に、その赤ん坊が神の御子であり、そしてこのように宣言しています。「イザヤ 9:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」

力ある神と言われます。その赤子がどうして、力ある神なのか？それは、天地創造の神が人間の肉体を取ってこの世に来てくださったからです。天地創造のことを考えてください。私たちは、ほんの少し地表が動くことで、それが天文学的なエネルギーが発せられていることを知っています。ましてや、この地の基、天の万象を主は、一日毎に造られたのです。どれだけの力を持っておられるでしょうか！さらに、知恵に満ちた方です。このような美しい自然、天体、地形、地殻、そして動物や植物の生態、どれを見ても、鮮やかなバランスと相互の関係で存在できていること、ここにとつもない知恵が隠されています。

2C キリストの血

その創造の力と知恵を持っておられる神が、その同じ力をもって私たちに救いをもたらしてくださいました。キリストが流された血が、その一人の方の血が、どんな人をも、どんな罪をも赦す力をもたらしているのです。「しかし、キリストは、罪のための一つの永遠のいけにえをささげて」とあり、「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげものによって、永遠に全うされたのです。(ヘブル 10:12,14)」とあります。たった一度の捧げ物で、一度の救いではありません、永遠の救いをもたらしたのです。どれだけ力強いことでしょうか！そして永遠であるだけでなく、どんな人も、全ての人を救う神の力なのです。「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならない負債を負っています。・・私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。(ローマ 1:14,16)」どんな人も、その人を罪から救う力があります。私たちも、救う力があるでしょうか？ありますね。

3B 楽しまれる方 17b

1C 存在の喜び

そして、「主は喜びをもってあなたのことを楽しむ」と言われます。彼らがそこにいるだけで、その存在を喜んで楽しんでおられるのです。私たちは、自分が何かをしているから、それによって主が私を喜んでおられると思ってしまいます。しかし、本質的には、いてくれるだけでうれしいのです。その存在が嬉しいのです。ラザロがよみがえって、その後で大勢の人がラザロを見に、マルタとマリヤの家に行きました。マルタはいつものように給仕していましたが、ラザロはただそこにいるということが、強烈な証しとなっていました。死んでいたのに甦ったのですから。私たちはとにかく、自分が何をすればよいのかということで押し量りますが、いいえ、その前に主に愛され、受け入れられ、

そして兄弟たちに受け入れられていること、その喜びの中にいれば、自ずと自分は安定し、主に仕えるようになっていきます。

聖書には、その存在を主が喜んでおられる姿が出てきます。一番代表的なのは、放蕩息子でしょう。彼は悔い改めて、父の家に戻りました。そして、父は彼を抱いて、接吻し、彼に一番良い着物を着せて、手に指輪をはめさせて、足に靴を履かせました。そして、肥えた子牛を屠って、祝宴をもうけたのです。父は、不満を言う兄息子に言いました。「いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。(ルカ 15:32)」これが父なる神の姿です。そして、この譬えを語られる前にイエス様は、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。(15:10)」と言われました。旧約時代のイスラエルも同じです、彼らは主に対して何でも不満を鳴らしました。しかし主は彼らを滅ぼすことをなされず、無事に約束の地に導き入れてくださいました。彼らを呪おうとしたバラムが、主がその言葉を祝福に変えられて、こう預言したのです。「ヤコブの中に不法を見いださず、イスラエルの中にわざわいを見ない。彼らの神、主は彼らとともにおり、王をたたえる声が彼らの中にある。(民数 23:21)」

2C 愛する安らぎ

そして、「**その愛によって安らぎを与える**」と言われます。主の愛によって、安らぎが与えられます。私たちは、自分が神からどのように愛されているかを確認してみないといけません。どこかで、「神の愛には限界がある」という思いを抱きます。「ここまでは愛してくださるけれども、これ以上何かをしたら、無理だろう」と思います。その不安があるので、何とかして愛を勝ち取ろうと心が焦るのです。けれども、私は次の御言葉が、自分が救われたばかりの教会で掲げられていたのを見て、驚きました。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。(1ヨハネ 4:18)」全き愛は、恐れを締め出します。ですから、深い安堵が与えられます。安らぎが与えられます。もし、私たちが、神の愛が分からないと言われたら、十字架を思ってください。そこには、自分のことを思っ、命を文字通り捧げてくださった神ご自身の姿があります。

3C 存在への歌

そして最後に、「**主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。**」と言われます。これは、にわか信じがたいです。神ご自身が歌うということ自体、想像が難しいです。イエス様が最後の過越の食事を取られた時にハレル詩篇を歌われましたが、けれども、私たちが主を愛し、それで主に歌うだけでなく、主ご自身がご自分の愛と喜びを言い表したいために、私たちに歌ってくださるのです。一言でいいます、「あなたは、神に愛されています。」喜ばれています、それを歌にしてまで言い表しておられます。何かをしたから、ではないのです。むしろ、何かをしでかした後でも、十字架でご自分にその責任を負わせ、そしてその傷を負ってでも、愛しておられるのです。